

ジェンダーのモヤモヤがすっきりする言葉を集めよう

作家・アルテイシアさんに聞く 次世代につなぐジェンダー対話

「我孫子市オンライン男女共同参画連続講座2023 第2回講演会」抄録

アルテイシアさんの講演内容から、キーワードを拾い出して再編集しました。誌面の都合で、用語解説などは最小限にとどめています。また、実際はもっと、モヤモヤしていたことが吹き飛ばすような、元気が出る語り口でした。より詳しいことを知りたい方、講演の雰囲気を味わって元気になりたいと思った方はぜひ、アルテイシアさんの本を読んでください。7ページに「読んでみよう！ アルテイシアさんの本」を掲載しています。



講師のアルテイシアさん
画像は、オンライン講座の画面
キャプチャによるため、不鮮明
な点はご了承ください。

ジェンダー知らなきゃ ヤバイ時代がやってきた

私は中学、高校とキリスト教の女子校で過ごしました。当然、学内では「女子生徒」ではなく単なる「生徒」で、会長も部活動の部長もみんな女性です。誰もが「女のくせに」と言われることはなく、男子がいなくて困ったことも一度もありませんでした。

大学は共学で、その途端に男尊女卑の社会を知りました。「賢い女は嫌いだ」とか、自分の意見を言うと「女のくせに生意気だ、でしゃばるな」とかは日常のことでした。飲み会では「お前みたいなブスと飲みたくないんだよ」と言われて言い返せず、「ブスな私がいけない」と傷ついていました。社会人になってもセクハラ、パワハラが当たり前でしたが、ある時、フェミニズムに出会って救われました。フェミニズムは、ブスな私がいけないのではなく、悪いのは相手であり、私は怒ってよいのだと教えてくれました。自尊心を取り戻すことができましたのです。私のように傷つく人がいなくなることを願い、フェミニズムやジェンダーについて広く伝えていこうと、ブログを書き始めました。本も出したかったのですが、当時は出版社から「このテーマは出版しても需要がない」と断られたものです。

しかしこの数年、#MeToo運動の動きもあって、世の中ずいぶん変わってきました。フェミニズムやジェンダーについて普段から見聞きするようになり、「ジェンダー知らなきゃヤバイ時代がやってきた」と感じている人が増えたと実感しています。私もたくさん本を書き、取材や講演、学校での授業の依頼を受けるようになりました。講演会や授業では女性だけでなく男性からも、よい反響をいただけるようになり、最近では、男性にも伝わるような発信を心がけています。

フェミニストの敵は 男性ではなく「性差別をする人」

子どもたちに授業で話すのは楽しいです。男子校にも呼ばれます。最初はとても警戒されているのが、ひしひしと伝わってきます。でも話しているうちに、彼らの警戒心が解けていくのがわかります。

授業は「フェミニズムとは？」から始めます。フェミニズムとは、性差別をなくそうという考え方だと話します。そしてフェミニストは「性差別に反対する人」、その反対はセクシスト、つまり「性差別主義者」です。フェミニズムというと「女vs男」とか、フェミニストは男嫌い、男の

敵とかいったレッテルを貼られがちですが、フェミニズムが嫌っているのは男性ではありません。性差別や性暴力であり、その構造やそれに加担する人々です。つまり、性差別に反対なら、男性でもフェミニストです。すると、男子学生たちから「フェミニストの見方が変わった」「自分もフェミニストだと気づいた」と反響があります。

男らしさ・女らしさの「型」にあてはめるのはやめましょう

ジェンダーについては、「男らしさ・女らしさ」といった『型』みたいなもの」だと話します。「型」を押し付ける社会では、「型」にあてはまらない人は叩かれます。たとえば「女のくせに料理もできないなんて」「稼げないなんて男失格だな」と言われることです。もちろん、男性が男らしくありたいと思っても構わない。でも、そうでなくても構わない。男らしさ・女らしさという「型」にあてはめるのはやめましょう。男はこうあるべき、女はこうあるべきといった固定観念や偏見をなくして、誰もが自分らしく生きられる社会にしましょう。

ある男子中学生が「自分はお菓子作りが好きだけど、それを話すと『女子力高いな』といじられるから嫌だ」と話してくれたことがあります。その子はもしかすると、お菓子作りをやめてしまうかもしれません。男の子らしくないと言われて好きだったことをあきらめ、将来の可能性に向かって羽ばたくための「翼」を折られてしまうかもしれないのです。

最近、久々に卒業した女子校の同窓会に参加したら、今の校長先生が「うちの学生たちの進路は今、理工系3割、医学系3割なんだよ」と話してくれました。世の中で女性が少ないといわれる分野に、後輩たちが進出していると知り、「女子は理系は不得意、もっと女の子らしい進路を」と言われずに、つまり、翼を折られずに済んだのだとうれしく思いました。

ジェンダーの呪いをなくそう

料理上手をほめるときは「女子力高いね」ではなく、単に「料理が上手だね」と言えばよいのです。料理が得意なのは女らしさではありません。女だから料理が得意というわけでもありません。「そんな細かいことを、いちいち気にするなんて」という人がいます。でも、言葉は文化を作ります。言葉は呪いにもなります。何も考えず発信し続ければ、それが次世代に引き継がれます。

私の母は、拒食症のため59歳で亡くなりました。その時の母の部屋には、壁一面に20代女性が着るような服がいっぱいかけられていました。「女は若さと美しさである」というジェンダーの呪いに殺されたんだと思います。男らしく生きようとしていた父もまた、商売に失敗して自殺しました。「男は稼ぐもの」という呪いに殺されたのでしょうか。「そんな強がらなくてもいいんやで」と声をかけてあげたかった。次世代の子どもたちのためにも、こんなジェンダーの呪いはなくしていかなくってはなりません。

パーソナル・イズ・ポリティカル

パーソナル・イズ・ポリティカル(個人的なことは政治的なこと)という言葉があります。第2派フェミニズムのスローガンです。

日本社会では自己責任や個人の努力不足を刷り込まれがちです。たとえば、ワンオペ育児であることをつらいと感じる母親が「これは自分の努力不足であり、自分で解決しなければならぬ」と考えてしまうことはよくあります。本当は、母親が育児を一人で担わなければならないという社会構造のせいで、子育て

しやすい社会づくりは政治の責任です。そのことに気づいて、どうか、自分を責めないでお願いします。

日本は世界の中でも父親の育児時間が極端に少ない国です。アイスランドでは男性の育休は当然の権利で、取らないという逆に不思議がられます。日本では「男は子育てより仕事優先」というジェンダーの呪いが残っていて、男性自身が、権利を奪われていることに気づきづらくなっています。男性もまた、それに気づいて、生きづらさから解放されてほしいです。

著書『ヘルジャパンを女が自由楽しく生き延びる方法』には、架空の男性「モブおじさん」が登場。私との対話を通して、フェミニズムやジェンダーについてアップデートしていきます。男性のみなさんも、ぜひ読んでみてください。



マイクロ・アグレッション に注意しよう

結婚、妊娠、出産の話は、マイクロ・アグレッション(小さな攻撃)につながるが多いので注意が必要です。マイクロ・アグレッションとは、攻撃する意図なく発した言葉が、結果として相手を傷つけてしまうこと。悪意がないゆえに、傷つけたことに気づきづらく、誰でもやってしまいがちです。結婚していない人に「諦めるのは早いよ」、シングルマザーなのに、休日に親子で外出すれば「今日はパパはお留守番?」、子どもが1人だと「2人目は?」、ゲイの人に「どんな女性が好み?紹介してあげようか?」、夫が育休を一年半取得するという妻に「旦那さん、偉いね」など、例をあげればきりがありません。いずれも余計なお世話です。言われた側はモヤモヤし、傷つきます。ここでも「そんな細かいことを、いちいち気にするなん

て」という声がありそうですが、言葉が呪いとなり、誰かを傷つけるようなことがあってはなりません。

安心しておしゃべりできる 居場所づくりを

私は、女子校が居場所で友達とのちよつとした会話で救われていました。その経験から、地元・神戸市東灘区で「ジェンダーしゃべり場」を始めました。「ジェンダーの話がしたいと思うことはあるけれど、今までそんな場所や機会がなかった」という話を参加者からよく聞きます。結婚している人もいない人も、女性はもちろん男性も、さまざまな人々が集まってきます。

この講座も同じですね。誰もが気楽に立ち寄り、みんなでおしゃべりして、誰もがちよつと安心してきて、居心地がいいと感じられる場所づくりを、全国に広げていきたいものです。

アルテイシアさんプロフィール

作家。1976年、神戸市生まれ。
ペンネームのアルテイシアは「機動戦士ガンダム」の登場人物にちなんだもの。
「ジェンダー感覚をアップデートして、性別を問わず、誰もが生きづらくない社会を目指し、共に次世代につないでいこう」と、多数の著書や幅広いメディアを通して呼びかけている。

全国各地の自治体や学校、企業などが開催する講演会でも登壇。



アルテイシアさんのSNSプロフィール画像

アルテシアさんに質問!

次のページへ続く ▶



Q

最近の「モヤモヤヒット大賞」はありますか? (女性、30歳代)

A

「男は雑談が苦手」と、ある対談で聞いたときです。それがジェンダーに詳しい方々の対談だったのでなおさらでした。ある子どもたちの練習試合を見守っている間、母親同士は雑談してるのに、父親たちはノートパソコンで仕事をやってみたり、スマホを見たりしていたのだそうです。でも、「男は雑談が苦手」というのは決めつけです。男性も上司やクライアントとはゴルフの話とかしてますよね。母親からは「雑談ではなく子どものためにつなかりを作っている。得意だからやっているわけではない」という声もあります。

同じような例で「女性ならではの気遣いや共感力」という言葉をよく聞きます。裏を返せば「男性は気遣いしたり共感したりするのが苦手だからしかたがない」という言い訳に聞こえます。男性だって、仕事なら大いに気遣いしているはずで、「できない」のではなく「しない」だけ。家族には気遣いなくてもよいと思っているのなら、自分にとって大切なものが何かを考え直してほしいと思います。

読んでみよう! アルテシアさんの本

『モヤる言葉、ヤバイ人から心を守る言葉の護身術』(大和書房、2023年6月)

『生きづらくて死にそうだったから、いろいろやってみました。』(講談社、2023年4月)

『田嶋先生に人生救われた私がフェミニズムを語っていいですか?!』

(田嶋陽子共著、KADOKAWA、2023年2月)

『ヘルジャパンを女が自由に楽しく生き延びる方法』(幻冬舎、2023年2月)

『自分も傷つきたくないけど、他人も傷つけないあなたへ』(KADOKAWA、2022年12月)

『フェミニズムに出会って長生きしたくなった。』(幻冬舎、2021年8月)

『離婚しそうな私が結婚を続けている29の理由』(幻冬舎、2020年2月)

『40歳を過ぎたら生きるのがラクになった』(幻冬舎、2019年2月) 他多数

SNS:



<https://facebook.com/artesia59> ●●

●● <https://twitter.com/artesia59>





アルテイシアさんに質問!

前のページから続き

Q モヤモヤした時、嫌だと感じた時、固まらず、笑顔でスルーもせず、自分の意見を伝える「瞬発力」はどうしたら身につけられますか？
(女性、40歳代)

A 練習あるのみ。ポイントは「反射的な笑顔の封印」です。多くの女性は「女は笑顔で愛想よく」と刷り込まれていて、何を言われても反射的に笑顔で返してしまいがちです。上司から「そんなふうだと、いつまでたっても結婚できないぞ」と言われたら？「そんなあ、やめてくださいよお」などと愛想よくしてはいけません。「えっ？」と驚いて、真顔で固まるのが効果的。「それ、どういう意味ですか？」とさらに静かに聞き返せば、それだけで相手も「あ、ヤバイ」と感じるかも。

でも、あとからでもいいのです。「職場に女性がいると華やかだよね」と上司から言われ、モヤモヤしていたある20代女性が、後輩たちのためにもと、その思いをあとから、丁寧にメールで伝えたそうです。「女性はお飾りで、実力で評価されていない」という思いをうやむやにせず、勇気をもって伝えたことはすばらしいと思いました。

私の著書『モヤる言葉、ヤバイ人から心を守る言葉の護身術』も参考にしてみてください。

Q 男性に、もっとジェンダーやフェミニズムを知ってもらうにはどうしたらよいでしょうか？
(男性、50歳代)

A 男性には男性から伝えるのが一番いいので、男性からどんどん発信してほしいです。なぜなら、女性がフェミニズムを発信するとバッシングされるけど、男性だと叩かれない。特に女性を下に見ている男性は、男性の話しか聞きません。ジェンダーの投稿をシェアしたり、おすすめの本などを自分のSNSで知らせたりするのはどうでしょう。男性同士の趣味の集まりでも読書会を開いたりして、話題にしてみてください。私の著書もテーマにいただければうれしいです。男性だけの集まりでなくても、家族で話してみたり、この講座のような集まりに夫婦で参加してみたりするのもいいかもしれません。きっと、ジェンダーやフェミニズムについて知りたい、話してみたいという仲間が見つかると思います。

Q 女性の役割や女性らしい生き方の押し付けは「男性→女性」だけでなく「ベテラン女性→若手女性」というケースもあると思います。そういう場合の解決方法を知りたいです。 (女性、20歳代)

A ベテラン女性からいわれる方が傷つきますよね。私は、こういう女性を「女王蜂になる人」と呼んでいます。「私の時はもっと大変だった、今の若い子は甘い、いちいち大げさに騒ぎすぎ。自分も苦勞してきたんだからあなたたちも苦勞しなさい」というわけです。

相手が男性だったら「おじさんクオリティー、よし、きた!」と思えますが、女性から「セクハラなんてスルーしたらいいじゃない」と言われると「女性なのに味方になってくれない」とがっかりします。いい先輩たちでも性差別の話題だと「まあ、もっと柔軟に考えた方がいいよ」といわれます。「柔軟に」は、「わきましろ、かわせ」と同義です。そうやってあいまいにしてきたから、セクハラも性差別もなくなるのに。

でも全ての先輩女性がそういう人ばかりでないはず。「自分が苦勞したからこそ、若い人にはそういう思いはさせたくない」という人を見つけてください。相談すればきっと、「それはおかしい。私から伝えてみようか」とカになってくれると思います。仲間を作っていきましょう。

Q お話を聞いていて、子どもたちへのジェンダー教育が大切だと思いましたがいかがでしょうか? (女性、60歳代)

A 私もそう思います。私はジェンダー感覚を掛け算の九九のようなものだと思います。ジェンダー感覚も、子どもの頃から学んで、身につけて、いちいち考えなくてもすむようになれば、「これはアウトだ」と直感で気づくことができるからです。性教育も同じですね。ある女子学生から「彼氏が強引にせまってきて、妊娠の不安があると断ると、おれのこと好きじゃないのかと詰められてしまう」と聞き、本当に深刻な問題だと思いました。性教育の進んでいるオランダでは10代の妊娠中絶が少なく、初性交年齢が高い。つまり性の知識が高まると慎重になり、自分を守れるようになるということです。日本でも性教育を進めた県で10代の妊娠中絶が大幅に減ったという事例があります。ジェンダー教育も性教育も自分を守るために、誰もが公平に受けられるとよいですね。

